
死ノ色狂想曲

風揺美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死ノ色狂想曲

【Nコード】

N1591V

【作者名】

風揺美月

【あらすじ】

「笑う」死神の少女に閉じ込められた美しい魔女。魔女を恋い慕う衛兵に「人間ではない何か」の男。その愛人。最愛の少女を失った男。彼らには共通に「死の匂い」が漂っていた。ファンタジー短編集（この作品は過去にエブリスタに載せたことがあり、また、現在も自作の小説サイトに載せています） 検索ワード ファンタジー 死神 魔女 ヤンデレ シリアス

虚像

「一政あ。一緒に遊んでよー」

俺はうざったい呼びかけを無視し、早足で歩く。声の主が裾を引っ張ったり足にまとわりつくうとしたりするが構いやしない。

「かーずーまーさー」

脳天気な呼び声は尚も続く。俺は舌打ちをし、足を早めた。

空は暗い雲に覆われ始め、道行く人々の足を速める。俺は声の主を振り切ろうと、その流れを割るように歩き続けた。しかし、宙に浮かぶことが出来るそいつの前には全く無力な行為だった。

「ねえ、返事してよう」

俺は無視を続ける。声と気配が消えたが、それでも緊張を緩めない。歩調を遅せずに、ずんずんと歩いていった。

……それにしてもやけに静かだ。これだけ静かだと逆に不安になってくる。

そして、その予感は見事に的中してしまった。

「えい！」

突如、視界が急激に変動し、身体が前に傾く。足を掛けられたのだ。俺は突然の出来事にどうすることも出来ず、早足の勢いで派手に転んだ。顔面を喫茶店前の巨大ソフトクリームに強打する。

「痛っ……」

俺は鼻を擦る。幸い、目は眼鏡に保護されている。鼻は痛いのが眼鏡に感謝。

俺は眼鏡をかけ直した。しかし真っ直ぐ顔に収まらない。鼻の辺りに、何となく違和感がした。

「眼鏡、曲がっちゃったね」

「は！？」

俺は急いで眼鏡を外した。鼻当ての部分が大きく曲がっている。急いで元に戻すと、鼻当ては歪な形に曲がってしまった。

「あーあ。眼鏡さんかわいそー。一政のぶきつちよ」

「お前……誰の所為だと……」

「杏子^{あんず}の言うこと聞かないからいけないんだよ？」

俺は忌々しげに振り返った。そこには小学校低学年程度の小さな少女、杏子が立っていた。

栗色でセミロングの髪にくりくりした大きな目。ドラマの子役と言っても通じるだろう整った目鼻立ち。緋色の袴の、白拍子の様な装束。顔面に貼りついた、不気味なほどに明るい笑顔。一見、和風テイストの妖精や小さな神様にみえる。しかし、杏子は妖精などという神秘的な存在でも、ましてや神などという高尚な存在でもない。

こいつは笑う悪魔だ。

こいつが現れたのは二ヶ月前。いきなり、俺の部屋の机の下から現れたかと思うと、ゲームに興じる俺の隣に、満面の笑みで座ってきた。話しかけても無理矢理追いつくとしてもそこから動こうとしない。

俺が杏子を見てみると、杏子は机の上の観葉植物を手にとった。しばらく杏子が植物を愛でていると、植物はみるみる枯れ、風化してしまった。杏子はその様子を、にこにこしながら見つめていた。

俺は気持ち悪くなって、一〇番するよう母親に言ったが、母親も妹も祖母も会社から帰ってきた父親も杏子を見ることが出来なかった。俺だけが見られ、俺だけが触れる。幻覚だと自分から言い聞かせ、消えるのを待っていたが、杏子は二ヶ月間、授業のときも食事のときも、友達と遊ぶときも俺から離れることはない。

そして、杏子が現れてから、俺の周囲に異変が起こり出した。

俺の知人が、次々に不幸に遭っていくのだ。

最初は祖母だった。杏子が現れてから二日後、心臓麻痺で突然死んだ。そして、一週間以内に父親が交通事故で腕を骨折し、母親が鍋をひっくり返して足を火傷して、妹の皐月^{さつき}がプールで溺れた。後の三人は命に別状はなかったものの、恐ろしくなって寺でお祓いをした。しかしそれは全く無駄だった。

被害は家族だけにとどまらなかった。

次に大工である叔父が仕事中に木材を切断する機械で手を怪我し、その次に実家が食堂を営む友人が火事に遭って友人は背中を大火傷さらに、部活の先輩が学校の屋上から転落し、俺の担任が空き巣に入られて二千万近く入っていた通帳と判子を盗まれた。これもほんの一部にすぎず、大体俺の周りで十人以上の人間が、怪我をしたり病気になって入院したりしている。

俺に不幸の飛沫が降りかかることはない。とにかく俺の周りの人間が次々に不幸になっていくのだ。

「一政あ？ なに一人で考えてんの？ なんか怪しいよ」

「おまえにだけは言われたくねえよコスプレ少女」

俺の言葉に杏子は黙り込んだ。もちろん笑顔を湛えたまま。

（そつえば俺、杏子が笑ってないところ見たことないな……）

俺は後ろから着いてくる杏子の顔を横目で見る。罵られたというのに、杏子の笑顔は全く歪んでいない。

俺は杏子の笑顔に、一種の嫌悪感を覚える。俺はこの二ヶ月間で、年中無休で笑顔の人間というものがどんなにたちが悪いのかを身をもって知った。

「一政、何見てるのぉ？」

杏子がにたと俺に話しかける。俺は杏子から目を逸らした。これ以上杏子の笑顔を見ていると気がおかしくなりそうだ。杏子は話しかけなくなっただけだと思つと、今度は俺の足に纏わり付きだした。思い切り振り払つても、気がつけばまた足にくっついていてる。

道行く人々が俺を不審の目で見ている。杏子が現れてからは日常茶飯事だが、やはり気分のいいものではない。

杏子は自分が俺以外には見えないことを知っていながら、むしろ俺の苦々しい顔を見て楽しむ様に、俺にちょっかいを出してくる。本当にたちが悪い。

俺は交差点で信号を待ちながら、杏子のシナリオ通りに苦々しい顔をして夕立の薫りがする空を仰いだ。

「おい、一政？」

俺の左後ろ側の道路から、杏子のものではない別の声が呼ぶ。俺は声の方向を見た。

あきのり
「……昭矩」

「よう、一政」

「あ、一政だ」

昭矩が黒いワゴンの助手席から手を振る。同じ部活の亮も一緒だ。

昭矩は小学生の時から親友で、毎日Ｔシャツとジーパンの野暮つたい俺とは違う、明るく洒落た男だ。杏子のそれとは違う自然で爽やかな笑顔に、俺は久しぶりに安堵を覚えた。

「一政どうした？ おまえ顔死んでるぞ？」

「ああ……うん。……なあ、昭矩」

「ん？」

「その車お前んちの？」

俺は昭矩が乗る車を指した。前に乗ったことがあるが、昭矩の家の車は白のセダンだったような気がする。

「そうだよ。先週兄貴が買った新車」

「……ふーん」

先週。ちょうど隣町に住んでいる、叔母と従兄弟が飛行機の事故に巻き込まれて入院した頃か。クラスが遠い上に、最近はあまり会っていないかったから聞いていなかったのだろう。

……新車か。嫌な予感がした。

「昭矩、運転気をつけろよ」

「お前お袋みたいなこと言うなあ。その前に運転すんの俺じゃないし」

「とにかく気をつけといて」

「はいはい」

信号が変わった。信号を待ちの群衆が動き出す。昭矩がいる車の列も一斉に進み出した。

「じゃあな昭矩」

「おう」

俺は大儀そうに歩き出した。再び空を見上げる。空は今にも雨が降りだしそうな重い重い色をしていた。夕立直前の蒸し暑さに、右手首のリストバンドが蒸れている。なんだか痒い。

（そろそろ帰るか）

「そうだね、そろそろ帰ろうか。一政」

俺は驚き、振り返った。そこには、にやにやと笑う杏子が立っていた。右手に大量の枯れた花を持っている。

「何そんなに驚いてんの？」

俺が黙っていると、杏子はぷつと吹き出した。杏子は枯れた花束を道端に投げ捨てた。

「一政っておもしろーい」

ああ、こいつがいたこと忘れてた。杏子は俺の後ろでくすくす笑った。いいつまでもいつまでも、くすくすと。

「何がそんなに可笑しいんだよ」

「ん？ あのね、嫌な予感ってよく当たるんだなあって思って」

「……は？」

突如俺の右で大きな衝突音と悲鳴が聞こえた。耳鳴りがする。とてつもなく、嫌な予感がした。

俺は、音のした方角を見る。

黒いワゴンが車線を越えて街路樹にぶつかり、フロントが大きく潰れていた。

「昭……矩……？」

対向車線を走っていた車がワゴンにぶつかり、ワゴンは炎上した。

俺は絵空事のような風景を、ただ呆然と眺めていた。

「あーあ。一人死んじゃった」

杏子の脳天気な声が背後から聞こえる。

（またこいつが……！）

俺は我を忘れて杏子の胸倉に掴みかかった。

「杏子殺してないよ？ 殺したのはあの黒い車さんだよ？」

杏子にたにたと笑う。俺の怒りは頂点に達した。

「ふざけんな！！ 父さんも母さんも臯月もばあちゃんも叔父さんも先輩も、おかしくなったのはみんなみんなお前が来てからなんだよ！！」

「そうだね」

「これ以上周りの奴を傷つけるな！！ 俺らの普通の生活を返せよ！！ この疫病神！！」

杏子は尚もにたにたと笑っている。杏子の笑顔が、俺の怒りに油を注いだ。

俺は怒りに身を任せ、杏子を思い切り拳で殴った。杏子の小さくて軽い身体はあっけなく吹っ飛んで、ブロック塀にぶつかる。杏子が顔を上げると、鼻から赤黒い鼻血が伝っているのが見えた。杏子はそれをごしごしと拭う。見るからに痛々しい姿だ。だが、それでも杏子の笑顔は変わらない。

「知りたいの？ 誰が死んだか」

明るさに冷たさを含んだ杏子の声。その杏子の一声に、場の空気が一気に冷却される。

大きな淡紅色の目が見開かれ、俺を見つめる。長い睫毛に綺麗な綺麗な淡紅。この目一つで、杏子がこの世の者ではないことを物語っている。俺は彼女の目に黙らされてしまった。

「じゃあ教えてあげる」

杏子は再びにっこりと笑った。

杏子は右手の人差し指をぴんと立てる。そして笑った。それはゆっくりゆっくりと持ち上げられて、

俺の額を指して止まった。

「……………は？」

俺の思考回路が、停止した。

「あん……………ず……………？」

杏子は口角を、これ以上は上がらない位に吊り上げた。

「何……言っただよ……」

紛れもなく俺の額を指した杏子の人差し指。俺は野次馬たちの間を抜けながら、事故現場に駆け寄った。

俺の目に真つ先に、街路樹と黒ワゴンの間から覗く、だらりとした腕が映った。腕は、見覚えがあるリストバンドをしていた。待てよ。俺が死ぬわけ……。

……あれ？

俺が死なないなんて、何時、誰が言っただっけ。

そもそも、杏子って……？

「杏子は疫病神じゃないよ？」

俺の問いに答えるかの如く、杏子が言う。杏子は足下に転がる枯れ花を指さした。

「やっとわかった？ この枯れちゃったお花も一政も、どこも違うところなんてないのにね」

俺も……この花も……。

……そうか。そうだな。やっと解った。

俺、死ぬんだ。

意識が遠のく。

あれほど人の死を恐れていた俺だったが、今となっては自らの死を、驚くほど容易く受け入れられた。

そして、俺の意識は眠るように地に落ちた。

「一政のばーか」

杏子は笑い、倒れた一政の身体——魂を軽々と背負う。そして杏子はふわりと宙に浮かんだ。

「ああ面倒臭い。自分が死んだってこと、わからないお馬鹿さんが

多いから大変なんだよね。最近」

核家族化や医療の発達による、身近な死に立ち会う機会の減少や、殺人を繰り返すテレビやゲームによる、虚構の死への慣れ。自分の死を認めない者や理解できない人間が増加し、死神

や悪魔の間で問題になっていることを、杏子は少しだけ思い出した。最近は無理矢理連れていってしまう死神や悪魔も多いから、さほど大きな問題ではなくなってきているが。

とにかく、ワゴン車に乗っていた三人は全員無事で、一政は何とか自らの死を理解できた。もう杏子が手を煩うことはない。

「ねえ、一政」

杏子は車と木の間の一政に語りかける。

「人って死ぬんだよ？」

杏子はパトカーと救急車の音、野次馬たちの声を背に、一政を連れて高く高く昇っていった。

夕立が虚ろな音を立てて、喧騒の上に降り注いだ。

虚像（後書き）

私が初めて文芸部で書いた小説です

先輩に校正してもらったら、すごいことになりました。校正が入り

まくって、結構厳しいお言葉と共に返ってきたんです
自分としては自信作だったので、結構ショックでした

今ではいい思い出（笑）

綺麗な女

長い長い栗色の髪。透けるような白い肌。澄んだ薄紅の瞳。落ち着いた優しい声。

美しい。

それが、あなたの第一印象だった。

「ねえ、蓮^{れん}」

「はい。美羽様」

「『紙』をとつてくれないかしら？」

美羽様はすらりとした細い指で、机の近くの箱を指差した。

「かしこまりました」

俺は山のように積み上げられた箱の中から、『紙』と呼ばれた正方形の紙を一束取って、美羽様の机に近づく。彼女の机には『紙』で折られた紙風船が隙間なく並べられていて、新しい『紙』置き場がない。

「机、片付けましょうか？」

「ええ。お願いね」

麻の大きな袋を持ってきて、丁寧に紙風船をその中に入れる。紙風船は見た目よりも重くて、ほのかに光を帯びていた。今日は橙色が多いな。

美羽様は、俺が紙風船を集めている間も、手を止めることなく慣れた手つきで折っていく。そして、紙風船に息を吹き込むたびに、疲れたように一息をつく。よく見ると、美羽様の額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

「あの……そろそろ休まれませんか？」

「……大丈夫よ。ありがとう」

「しかし……」

「大丈夫。この位でへこたれてたら、この仕事はやっていけない

いわ」

「憎く……思われないのですか？ 自由を奪った政府を……」
「いいえ。全然」

そう言つて、美羽様は笑った。俺は愛らしい笑顔を向けられて、顔を真っ赤に染めた。

そして、同時に哀れみも覚えた。

大丈夫な訳がないじゃないか。彼女の『力』は、相当な気力と体力が必要なはずなのだから。

でも、美羽様には休む暇も自由もないし、許されてもいないのだ。彼女は、魔界政府認定の、特別能力を持つ魔女なのだから。

美羽様が魔界第二政府認定の高等魔女として、政府に連れて来られたのはいまから十四年も前。彼女が五歳のときだった。

美羽様の能力は、何もないところから生命体。人間でいう魂を生み出すこと。『紙』で紙風船の『卵』を作つて、そこに息を吹き込むだけで、新しい命を生み出すことができる。

しかも、作り出すのは人間やそこら辺の魔物のような、無能で軟弱な生命体ではない。美羽様が生み出すのは、天界に送る天使や冥界に送る死神、大きな力を持つ魔女や魔法使いなど、世界を構成するのに不可欠な者たちばかりだ。

生きている人間とは構成が一から違っている為、ほとんどの人間には見ることに出来ないが、彼らは魔界や人間界、冥界の秩序を保つため、日々働いている。

それはさておき、作り出される魂の能力は、『紙』によって異なる。

まず、赤い『紙』からは、攻撃魔法に長けた魂を。

橙色の『紙』からは、戦闘能力が高い魂を。

黄色の『紙』からは、体力がある魂を。

緑色の『紙』からは、治癒魔法に長けた魂を。

青い『紙』からは、知能が高い魂を。

紫の『紙』からは、直感の鋭い魂を。

白い『紙』からは、天界に送る天使を。

黒い『紙』からは、冥界に送る死神を、それぞれ生み出す。

そして、美羽様が折る『紙』はその時の状況により、政府に決められて、政府に支給される。

未成年の魔界政府の高等魔術師・魔女の九割は美羽様が生み出した者だと聞いているし、天使や死神の人材派遣は、美羽様が生み出した者でないといけないらしい。

今現在、美羽様と同じ能力を持つ者は魔界に二人としない。

それ故、彼女は政府に管理され、故郷に帰ることも許されずに、ずっとここで紙風船を折っている。

十四年間も、延々と。

もつとも、俺は二年前にここに配属されたばかりのただの衛兵だし、美羽様は二日に一度護衛しているだけだからそれだけしか知らないが、彼女を政府から出してはいけない理由がきつと他にもあるのだろう。

そのような話を聞き、最初に俺は、美羽さまは悲劇のヒロインのような人だと思っていた。

しかし、実際に美羽様に会ってみると、そんな境遇におかれている人だとは全く思えなかったのだ。美羽様は優しくて、穏やかで、美しかった。

そして、そんな美羽様を、俺はいつしか恋い慕うようになってしまったのだ。

「ねえ、蓮？」

「は、はい」

何度聞いても綺麗な声だ。美羽様は珍しく、俺のほうを向く。彼女の薄紅色の瞳が、俺を見る。やはり綺麗な。

「杏子は元気にしているかしら？」

「杏子……ですか」

一年前に生まれた、欠陥児の死神の子か。

欠陥児とは、息を吹き込む際に失敗したり、『卵』を潰してしまったりして、一部が欠けていたり精神的な障害を起こしていたりしている魂のことだ。

杏子の時は、担当していた衛兵が間違つて『卵』の上に物を落としてしまい、潰してしまつたのだと聞く。確か、杏子の異常は軽い人格障害だつたわけ……。

二ヶ月前に冥府に出張したときに見た時は、人間界から持ち帰つた「でいーえす」とやらで楽しそうに遊んでいたな。

「杏子は元気でしたよ」

「そう。よかった」

「あの……美羽様の作られた者は何百何千といらっしゃるのに、なぜそのように気にかけるのですか？　きりがないと思うのですが……」

「それ、よく言われるわ」

美羽様はくすくすと笑つた。俺は恥ずかしくなつて、再び顔を染める。

「私にとって、私が作つた子たちは皆私の子供と同じ。気にかけないわけがないじゃない」

美羽様は俺をじつと見据えた。見透かすような彼女の瞳。その中に映る俺はあまり平凡だつた。

俺は愚か者だ。

こんな俺が、美羽様に届くわけがないじゃないか。

それでも、美羽様が俺を見つめるたび、優しい声で話しかけるたび、俺に笑いかけるたびに、微かに期待してしまう。

俺は、本当に愚か者だ。

「蓮？　蓮？」

「は、はい！　何か！？」

「見て。あれ」

美羽様は窓の外を指で指した。

外では、赤色と橙色の制服を着た少年少女が武器を肩にかけ、行進

していた。

行進の真ん中には、大きな戦車が五月蠅い音を立てて進む。戦車の上には、立派な髭をした軍の総長が、いかつい顔をして立っている。

「あれ、戦う車よね？」

「はい……何が起きたのでしょうか……」

俺は家に帰ってから新聞の号外を見て、戦争が始まったことを知った。

そしてやっと、最近美羽様に配給される『紙』が、赤色と橙色だけになっていることに気づいた。

魔界の中には、政府が全部で五つある。

魔界の中央に位置する、一番古い歴史をもつ第一政府。北の第二政府、南に位置する第三政府、東に位置する第四政府、そして、西に位置する、一番新しい第五政府。

もともとは中央の政府一つだけだったものが、長い歴史の中で、分裂や独立を重ねて、五つに分かれたのである。

それぞれが個々に法律を定めて自治をし、土地に境界線を作って、事実上魔界は五つの国に分かれているのだ。

特に、長い戦争を経て分かれた第一政府と第二政府は犬猿の仲で、独立後も何度か戦争を繰り返している。

今回もまた始まった戦争。これでたしか十二回目の戦争だ。

今回は美羽様の力があるから、第二政府の勝利は確実だと新聞にはある。今回の戦争では、民間からの出兵はしない。民衆は大喜びだった。

そのかわり、今回は美羽様が作った赤と橙の子を戦場に送るのだという。先輩の衛兵の話によると、治癒魔法専門の魔術師や魔女は民間の方に送るため、戦場には出向かないという。つまり、赤と橙の兵士たちは使い捨てだということだ。

人道に外れたことだということは、中央のお偉方も民衆もわかってはいるはず。しかし、だれも止めようとしない。家族や親戚を戦場に

送りだそうとする者はいないのだろう。孤児の俺にはわかり得ない感情だが。

今日の美羽様付きの護衛は、俺だ。

美羽様はどんな顔をしているだろう。これから、殺人兵器を作らなければいけない事を享受できるのだろうか。

せつかく生み出した自分の子供たちを戦場に送り出すことを、あの人は納得しているのだろうか。

いや。納得しているはずがない。

争いが嫌いな美羽様が、自分が作った子を大事に思っていた美羽さまが、あんなにも心が綺麗な美羽様が、こんな戦争に賛同するはずがない。

美羽様は今度こそ、自分と子供たちの境遇を嘆いているだろう。なぜ自分が人を傷つける兵器を作らねばならないのだと、かわいい子供たちを人殺しの道具にしなければならないのだと、悲しんでおられるだろう。

俺は決心した。美羽様の味方になろう。

俺は今まで、美羽様を慕い、崇めるだけで、彼女のために何もしてこなかった。

今こそ、美羽様の為になれる。無力な衛兵の俺が、美月様の力になれる。

そう思った。

なのに。

「わたしって幸せよね」

「……………え？」

今、この人は、なんて言った？

「この民衆のために、働けるんだもの。私が『卵』を作れば、その分民衆から戦場に行く人が少なくなるでしょう？ 幸せとしか

言いようがないじゃない」

「しかし、美羽様が作られた子供たちは使い捨ての兵士として戦場に放り込まれて、第一政府の兵士や民衆を殺していくのですよ！？ そんなこと、納得できないじゃないですか！！」

美羽様は、ただにつこりと笑った。いつものように、優しくて完璧な笑みを作った。吐き気がした。

こんな汚い人、美羽様じゃない。

「……いやだ」

「え？」

俺は椅子に座る女の胸倉を掴んだ。もう片方の手で腰の刀を抜き、首筋に当てる。女は抵抗をすることも、悲鳴をあげることもしない。

「蓮……」

「……なんだよ」

「私ね…… 幸せだったよ……」

「……まだ言うのか……」

「だって、私はこんなに綺麗で清潔な服を着られて、美味しいご飯を食べられて、いい部屋に住めて……。私がこの能力をもってなかったら、こんなにいい暮らしできなかったわ。生まれてくる子たちも皆可愛くて、愛しくて、大好き。この力がなかったら出会ったことすらも出来なかったでしょう？ この力をくれた神様に感謝しなきゃ」

「なぜ神を憎まない！？ お前をこんな牢獄に閉じ込めて、こんなくだらない仕事を延々とさせている政府を、神を、どうして憎まないんだよ！？」

刀を持つ右手に力がこもる。それでも、女は静かに俺を見つめていた。

「憎む……か。……一つだけ、憎みたいことはあるよ」

女は、悲しげにまぶたを伏せる。女の服を掴む、俺の左手は汗ばん

でぶるぶる震えていた。女は、静かに口を開く。

「私に憎む心を教えてくれなかったこと」

「……意味がわからない。憎しみなんて、あなたには必要ない」

「私に自由を教えてくれなかったことはいいの。親の温もりを奪ったこともいい。それを憎いなんて思ったことないの。だって、憎しみを知らないんだもの」

俺は、なんと返したらよいかわからなかった。

憎しみを知りたい？ なぜ？ 感情の中で、最も苦しくて汚くて面倒な感情じゃないか。

「そんなの……知らなくていいんだよ。それを知ったら苦しいだけじゃないか……」

「だから悲しいの。憎いとさえ思えたら、こんなに悲しくないのに。憎しみさえ知っていれば、こんなに辛くないんでしょ？」

女の声が震える。女の目から、涙がぼろぼろ零れ落ちた。

もういやだ。

俺は、女の首に刀を突き立てた。首から赤いものが噴き出す。かまわず腹にも刺した。女は椅子から転がり落ちる。それでも、俺は手を止めない。腹に何度も何度も刀を振り下ろした。

気が付くと、女は仰向けに床に倒れていた。女は死に切れなかったようで、今にも閉じてしまいそうな弱々しい瞳を、俺に向けている。俺は肩で呼吸をし、倒れている女を見下ろした。

「……これが、憎しみの心なの？」

「……違うよ」

あんたには永遠に理解できないだろう。

女は、静かに目を閉じた。刀は音を立てて床に落ちた。

「ははっ……できた……」

できた。やった。

コノ人が綺麗ナママ、俺ガ、消シタ。

でも、なんでだろう。

涙が止まらない。

俺は、亡骸を抱きしめて、声を上げて泣いた。

いまごろ気づいてももう遅い。

この人は、こんなに無知で純粹だったから美しかった。

そして、もう物言わぬ抜け殻のこの身体だけでは意味がないんだ。

俺が、この人の光を奪ったんだ。

「美羽様……美羽様……ごめんなさい……」

俺は身体を揺らし、何度も名を呼んだ。

そのとき、血染めの刀が目に残った。

「あ……」

俺は刀を手に取り、眺める。

そうか。俺も死ねばいいんだ。

俺は力なく笑った。目からもう一筋、涙が零れ落ちる。俺は柄を握り、胸の中心に向けた。

美羽様。

行く場所は違う俺でも、冥土までのお供くらいはさせていただけますか？

胸の真ん中に激痛が走る。美羽様の上に倒れる。走馬灯が回って、そして、すぐに消えた。

綺麗な女（後書き）

私がお気に入り登録している「KOHSAWAKURA」さんの小説、「紅い瞳のメサイア」にいる「藤乃宮沙良」は実は私が作ったキャラクターで、この小説の美羽さんが前身だったりします
メサイアもぜひ見てくださいね♪

KOHさん、楽しい小説を書く能力はピカイチですから♪

零の憂鬱と壱の希望

零の憂鬱と壱の希望。

それが、死神の理想的な仕事のカタチだと、初めに言ったのは誰か。杏子は、時々母の美羽からその話を聞かされてきました。

「ね、杏子。ほとんどの場合人の死は悲しみに満ちたものなの。死神の仕事はね、魂を冥界に運ぶだけじゃなくて死の悲しみから魂を救うことも大切な仕事なのよ」

「悲しみ……悲しみ？」

杏子には、「悲しみ」がなんなのか分かりませんでした。悲しみという感情が存在することは知っています。暗くて重くてとても辛い感情だということも知っています。しかし、杏子はその本質が分からないのです。

なぜなら杏子は、悲しみの心が麻痺してしまっているのですから。

「おかあさん。私わかんないよ」

「俗世間はね、苦しいことだらけなんですって。特に人間界はね。その苦しみに満ちた世界からこちらの世界に行けることは、とっても素敵なことだと思わない？」

「おかあさん。でも冥界に行っても、みんなが幸せになれるとは限らないよ？ 天界に行ける魂もいれば、地獄に落ちる魂だっているんだよ？」

杏子はニコニコとしながら、母に聞きます。見るからに明るすぎる笑みでした。けれど、美羽はそれを咎めることはせず、静かに答えました。

「少なくとも、欲や苦しみに満ちた人間界よりはいいんじゃないかと私は思っわ」

「おかあさん、おかあさんは苦しくないの？」

杏子は相変わらぬ満面の笑みで聞きます。

「なにが？」

「こーんな部屋に押し込められて毎日毎日つまらない折り紙遊びやらされて。第二政府のえらい人はおかあさんの苦しみなんでしらんぷり。憎いとは思わないの？」

「憎い……か」

美羽は遠い目をして、小窓から覗く空を見上げます。真つ青な空を自由に飛ぶ鳥。それを見た美羽の顔は、なんだか少しだけ悲しそうでした。

「憎いとは思わない。私は、杏子が悲しみを知らないのと同じで、憎いっていう気持ちがどんなのか分からないから。悲しいとは思いますが」

「ふーん」

杏子は興味なさげに相槌を打ちます。そして、何かを思い出したのか、ぱつと表情を晴れやかにして、言いました。

「あ、おかあさん。今日ね、久しぶりに人間界でのお仕事あるんだよ」

「あら本当？　よかったわねえ」

「見て見て！　これが今回のターゲットだよ！」

杏子は足元に置いた、任務の詳細が書かれた冊子を手に取り、最初のほうのページで捲る手を止めると、美羽にぱつと開いて見せました。

「朝日一政。今回は男の子なのね」

「うーん。私はこんな冴えない男の子嫌いなんだけどね」

杏子は人差し指で冊子の写真を指しました。

「私が好きなのは、こんなじゃないもん。ムキムキマッチョの渋いおじさんだもん！」

「こらこら。ターゲットの文句を言っではいけません」

美羽は戒めながらも、くすくすと笑います。

「いい？『零の憂鬱と雫の希望』よ。憂鬱を与えずに、ささやかな希望を与えるの。それが死神の理想のあり方よ」

「はい」

杏子は元気に返事をし、「じゃあね」と一言言ってから美羽の部屋を去りました。

今日の人間界の「トウキョウ」は、今日の魔界と同じ、雲一つない晴れでした。杏子はご機嫌です。

「それにしても、零の憂鬱と壱の希望ってどうやって表せばいいんだろう」

杏子に行く途中で出会った死神仲間に聞いてみました。

一人目は、「明るい歌を歌いながらでてきたら」といいました。

杏子は歌が好きです。それはいい考えかもしれませんが。

二人目は、「お花を持ってでてきたら」と言いました。

それもいい考えです。綺麗な花を見て、気分を悪くする人はいませんからね。

しかし、杏子は花を持つことが出来ません。なぜなら、彼女が花を持つとみるみる枯れてしまうからです。

他の死神にはない特別な体質。「死」をつかさどる死神にとって、それは、並外れた力の持ち主だということを示すものなのですが、杏子にとっては邪魔な能力以外の何物でもありません。杏子はこの能力が嫌いです。

杏子がニコニコとしながら人間界の町を歩いていると、花屋さんが見えました。

杏子はその近くに近寄ります。杏子が店先のかすみ草を手にとると、握ったところからかすみ草は枯れていき、風化してしまいました。

「あーあ。枯れちゃった」

「お嬢ちゃん。一人かい？」

お店の中から、白髪交じりの、店のおじさんが出てきました。初老で黒ぶち眼鏡の男の人は心地よい笑顔で杏子を見つめます。杏子は驚きました。なぜなら死神は普通、ターゲット以外の人間には見え

ないからです。

「おじさん。杏子のこと見えるの？」

「見えるとも」

「靈感強いのか？」

「強いのかもね」

杏子は、おじさんの周りを見ます。そこには、低級霊がわさわと集まっていました。

人間界を彷徨う靈魂は、しばしば靈感の強い人間のそばに集まります。杏子は、このおじさんが靈感の強い人間なんだと、確信しました。

「ごめんねおじさん。お花枯れちゃった」

「ん？　なんで枯れちゃったのかな？」

「私、お花を持ったら枯れちゃうの」

杏子はおじさんに怒られないかちよっぴり心配です。ただおじさんはにっこり笑って言いました。

「かまわないよ。もうすぐ捨てるお花だったからね。誰かにプレゼントしたいのかい？」

「うん」

「じゃあちよつと待つてね」

おじさんが店の奥に消えます。少し経ってから持ってきたのは、コスモスの造花、数本でした。

「これだったら持つても枯れないね」

「ありがとう！　おじさん」

「どういたしまして」

杏子はそこでおじさんと別れました。そして、るるん気分ですキップしながら、ターゲットの元へと向かいました。コスモスの花は美しさを失わず、杏子の手の中で揺れています。太陽は西に傾いていました。建物の影が長くなります。ターゲットの元にたどり着く頃にはおそらく夜になっているでしょう。普通の子供ならもう家に帰っている時間です。

けれどそれは杏子に関係のないこと。だって杏子は死神なのですから。

「咲ーいーたー。咲ーいーたー。チューリップの花がー」

杏子は仲間に言われた通りに歌います。そして、ターゲットの元にたどり着いたら、このお花を差し出して言っのです。

「零の憂鬱と、壱の希望がやってきましたよー」

と。

零の憂鬱と吉の希望（後書き）

私としては珍しく、明るい小説です♪
敬体で書くの難しかったですよ；

残酷な子供

「魔界第二政府」

そこに、美しくも強大な力を持った高等魔女、美羽と、衛兵の蓮がいた。

蓮は美羽に密かに恋心を抱いていた。しかし、その心は歪んだ方向に、美羽に向けられてしまう。蓮は美羽を、長剣で刺し殺してしまつたのだ。美羽は無惨に死に、蓮は自分が犯したことの罪深さと最愛の女を失つた悲しみに耐えきれず、すぐに後を追つた。

紅葉の葉が紅く色づく、秋の夕暮れの話である。

「おかあさん。あれ？　おかあさん」

部屋の扉の前で、母を呼ぶ子供の声がする。声の主は、淡紅色の瞳の、満面の笑みの少女。杏子だ。

「おかあさん。今日ねえ、やつとあのおばかメガネの一政くんが殺られたよー。二ヶ月もかかったの。時間かけすぎて死神長くんから怒られちゃったー。……ねえ、聞いてる？」

杏子は閉ざされた扉をドンドンと叩く。

「……へんじがない。ただのしかばねのようだ」

近くを通りかかった、小太りで色白の衛兵が扉を叩く音に気づき、杏子を捕まえる。

「杏子様！　そんな縁起でもないことをおっしゃらないでください！　美羽様はお仕事で忙しいのですよ！」

「だって、本当に死の匂いがあるんだもん」

杏子は、につこりと笑つて言つた。衛兵は得体の知れない恐ろしさに、ぞくりと青ざめる。

「ここ、開けなくっちゃ」

戸を開けようとする杏子を見て、衛兵は我に歸つた。

「お待ちください。ここの部屋は大変強い結界が張られておりますゆえ、結界担当の魔術師を呼ばないと開けませんよ！」

杏子は衛兵の言葉を見無視して扉にポンと手を置き、目をカッと見開く。

「消えろ」

目を見開き、そうつぶやくと杏子は扉から手を離す。そしてくりりと振り返って、衛兵に言った。

「これでもう大丈夫だよ」

「お待ちください！ 結界を無理にこじ開けると、杏子様のお命に限りま」

「黙ってよ」

杏子は明るい声でそう言い、ドアノブを掴んで引く。何事なく、扉は開いた。衛兵は驚きを隠せない。

「杏子……様……」

「いくよ。ゆきだるマン」

「あの、ゆきだるマンってわたくしのことですか？」

「ごー！」

衛兵の問を見無視し、杏子は部屋に入ってしまった。

杏子は部屋をずんずん進む。部屋には山のように箱が積み上げられており、見通しが悪くて進みづらい。

「待ってくださいよ杏子様……わたくしは大きくなかなか進めないんです」

衛兵の目に、信じられない光景が飛び込んだ。首と腹を紅に染めた女に、心臓に長い刀を突き刺した男。床にも壁にも机にも箱にも、血が飛び散り、部屋は赤一色に染まっている。

衛兵はそこに立ち尽くしていた。いや、見とれていたのかもしれない。

まるで絵空事のようなのだ。この部屋の光景が。

真ん中に静かに倒れた二人の男女を真紅の血が彩り、まるで「ここを侵してはいけない」と諭しているようだった。

衛兵は暫く立ち尽くしていたが、隣に杏子がいたことを思い出す。既にもう遅すぎるのは承知だったけれど、杏子の目を覆おうとした。「いけません!!」

杏子は無言で、ぴしゃりとそれを払いのける。そしてずかずかと血の海の中に歩いて入り、二人の亡骸の前で止まった。しゃがみ、母親の顔を覗き込む。杏子の顔は、相変わらず笑みを湛えている。

「おかあさん。かわいいそー」

「誰か人を……!!」

衛兵が立ち上がり、部屋の外に駆け出す。杏子はやはり、笑顔のまま語り続けた。全てを見透かすような瞳で、二人を見つめる。

「こんなろくでもない自己中男に殺されちゃってさ。結局、おかあさんには死んでもわかんないだろうね。憎しみの心なんてさ」

杏子は、母親の額をちゃんと指で弾く。そして、にいつと笑った。

「だって、憎しみを知ってたら、おかあさんはこんな死に方しなかったもんね」

残酷な子供（後書き）

子供って怖いですよね時々

「シーチキン」とか言いながら捕まえたトンボを真つ一二つにしたり、笑いながら蟻を踏みつけてたり
うわ。思い出したら寒気が……↑

愛妻家の朝食（前書き）

この小説のメインの人物がなんか高杉もどきです
ごめんなさい。好きなキャラって、影響受けちゃうんですorz

愛妻家の朝食

今からおよそ百年ほど前。魔界と人間界の狭間の、和風の小さな家に仲睦まじい二人の男女が住んでいた。

人間ではない何かの彬あきひと、元々人間界に住んでいた、普通の人間の桜。これは、その二人の日常を描いた物語である。

「ね、彬」

「なんだ」

彬は着流しを着て、縁側で煙管をふかしていた。その目の前に長い黒髪の美少女、桜は、梨を出した。唐突な梨の登場。彬は表情をぼかんとさせた。

「果物つて、煙草の害を少し防ぐんだつて。知ってる？」

妙にご機嫌な様子で桜は尋ねる。彬はため息をついた。煙管の煙が、部屋の中を舞う。

「馬鹿馬鹿しい。第一、俺が吸ってるのは煙管だ。煙管吸ってて悪いか」

彬は面倒そうに言い放つ。桜は、突然泣き出しそうになって続けた。

「やだ。彬が死んじゃう」

「は？ 死ぬ？」

「肺真つ黒になって病気になるって死んじゃう……うう」

桜は目を涙で潤ませた。今にも泣き出しそうな赤ん坊のようだ。彬は桜は以前人間界に行ったときに、「煙草中毒」という本を本屋で買っていたことを思い出す。あまりに無愛想で難解な内容に桜はすぐに飽きて、今は本棚の隅で埃を被っているが。

「俺が死ぬわけがないだろ？ 俺人間じゃねえし」

「せっかく人間界で梨買ってきたのに」

しょんぼりした様子で、桜は肩を落とす。彬は大きいため息をつい

た。桜の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「わかった。わかったよ。食べばいいんだろ食べば。食うからそんな顔するな」

「ほんと？」

「ああ」

桜は涙を拭い、浮き立ち足で台所へと向かった。皮でも剥きに行くのだろう。そろそろ刻み煙草が燃え尽きてきた。そこでふと、彬の心中に不安がよぎる。

（待てよ。あいつ、梨の皮剥けたっけ？）

彬がそう思った直後のことだ。台所で何かが落ちる音がした。

「痛いっ！」

台所から聞こえてくる悲鳴。

（ああ、言わんこっちゃない）

彬は煙管を置き、台所に向かった。桜は包丁を置き、まな板の上に皮を剥きかけの梨を落として、右手の親指を眺めている。

「どうした？」

「手、切っちゃった」

彬は桜の手を見る。桜の親指には、鮮やかな赤色の線が一本引かれていた。

「あーあ。大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

大丈夫と言っではいるものの、桜の指からは血がぽたぽたと流れ落ちていく。彬は桜の指をカプリと啜えた。桜は不思議そうな顔をした。

「ん？ 彬？」

桜の傷をつつと舐め、血を吸う。桜は舐められた所がむず痒くなるのを感じた。見ると、先ほど切ったところの傷が塞がっている。桜はぱつと顔を明るくして子供のようににはしゃいだ。

「わあ！ 治った！ 彬すごい！」

「貸せ」

彬はまな板の上にある梨を手に取り、慣れた手つきで皮を剥きだした。

（梨を剥く位で怪我しやがって。こいつのことだから仕方がないのか……）

桜はもともと、北乃宮家という、人間界の高級官僚一家の姫君だったのだ。包丁を握ったことすらない箱入り娘が、梨の皮を剥けるわけがない。

彬は半ば呆れつつ、さつさと皮を向いた。皮はしゅるしゅる

と剥かれ、瑞々しい表面があらわになる。桜は横にくつついて、その様子を眺めていた。

「彬って本当に器用なのね。私なんて、見よう見まねで剥いてみたけど、全然できなかったもの」

「お前、ここに来る前は台所に入ったこともなかっただろ」

「う……凶星よ」

（これだからお嬢様は困るんだ）

桜にはこんな過去がある。

小さい頃から桜はその家柄と可憐な容姿から、一般世間でも有名だった。二つ名は「北乃宮の天使姫」。桜が有名になればなるほど、北乃宮家は父親が新たな位を与えられたり、若年の長男が上級の役所に就いたりし、ますます発展していった。

そんな北乃宮家に事件が起きる。桜が復讐のために、父親の上司を殺すという事件を起こしたのだ。北乃宮家は取り潰しになり、桜は早急に捕らわれ、打ち首になった。

……というのは世間一般に伝えられた話。この話には裏がある。

打ち首になる前夜。桜は突如として牢から姿を消す。食事は食べかけのまま。鍵もかかったまま。脱獄というよりは、まるで神隠しにでもあったような有様だった。死に物狂いで探し回ったが、警察もお手上げだ。

この事件は大きく新聞にも取り上げられており、公開処刑の日取りも報道されていた。面目を失いたくない警察は代わりの罪人の少女

を連れてきて、処刑を終わらせたのである。

そのときに桜を牢から連れ出したのが彬。彬の力を使えば、女を一人牢から連れ出すことは難しいことじゃない。彬は人間界から離れた自分の家に桜を愛人として置き、一緒に暮らし始めた。

ここに来たばかりの桜はひどい状態だった。憎しみで心が真っ黒に染まっていたのだ。緩やかに時間が過ぎていくこの世界で彬が癒し、慈しみ、もとの桜に戻していった。今では桜がもともと持っていた無垢な笑顔も見られるようになっていた。

楽しそうに皿に梨を盛る桜。彬は満足げにふっと笑うと、梨剥きを続けた。

「出来たよ彬！」

梨を剥き終わり一足先に居間に戻った彬の前に、桜が梨の盛られた皿を持ってきた。意外と早く盛り付けは終わったそうだ。桜はちゃぶ台の上に皿を置く。梨の表面が縁側から差し込む日光に照らされて、瑞々しく光っている。

「綺麗に盛れたでしょ？」

彬は皿の上の梨を見る。綺麗に盛ろうとした努力は見受けられるが、梨は倒れたりバラバラの方向を向いていたりしていて、お世辞にも綺麗とは言えない。彬が無言で皿を見つめっていると、桜は梨を取り、先に食べた。

「ん！ 美味しい！」

「そうかい」

「彬も一緒に食べようよ」

彬は梨を取り、口の中に放り込んだ。噛むと、梨の甘い味が、口いっぱいに広がった。何個か食べた後に、彬は煙管に火を着け、吸い始めた。

「あ！ 彬、また煙管吸ってる！」

「お前の言う通りに、果物食べたんだからいいだろう」

彬は煙をふうと吐く。桜はため息をついた。

（せっかく彬のために頑張ってお皿に盛ったのに）

桜は肩を落とす。疲れが一気にどつと押し寄せてきた。

「私、ちよつと疲れたからお昼寝するね」

「こんな時簡に珍しい。まあ構わねえが」

桜は縁側のある部屋に布団と毛布を出し、そのまま眠りについた。

夢を見た。まだ桜が北乃宮家にいた頃の夢だ。

父上に母上。兄上。妹に弟。桜が大好きな人たち。

しかし、それはすぐに消える。足元に転がる、家族の無残な姿。そばに立つのは、血に濡れた短刀を握った一人の男。あの人はたしか、父上の上司の高官様。

卑しく笑う高官。家宝の日本刀を振り上げる桜。恐怖に顔を歪ませる高官。

そして、辺りは一面紅に染まった。

桜は、もともと静かだった空気を切り裂くような長い悲鳴を上げる。隣の布団で寝ていた彬が驚いて飛び起きた。

「どうした！ 桜！」

「父上が、母上が、兄様が、葉月が、那月が、あの男が！」

泣き叫びながら狂乱する桜。彬は桜の肩を揺する。

「落ち着け！ あの男は死んだ！ お前が殺したんだよ！」

パニックに陥っていた桜は、ぴたりと止まった。そして、呟くように言った。

「私が、殺した？」

「もうお前に危害を加える奴はいない。俺がいるだろう。お前の平穏は俺が守る」

彬は桜を抱きしめる。桜の目に涙が溢れてきた。

「彬、私は人殺しだよ？」

「ああ、奇遇だな。俺もだよ」

桜は深呼吸をして呼吸を整える。それを見た彬は心底安心していた。（大丈夫だ。心の傷は癒えている。ここに来たばかりの頃は、こう

やつて落ち着くこともできなかったからな。」

以前の桜なら、『人殺しをしてしまった』と言ってさらに狂乱していただろう。桜は落ち着くと外を見た。

「夜になつてる。なんで気づかなかったんだろ」

「あれだけ大騒ぎしちゃ、気づかないだろう。お前が昼寝してる間に夜になつてたんだよ」

明かりは行灯あんどんの光と月の光のみ。彬が行灯の光に照らされて、端正な顔が闇の中で際立っている。

それから桜は、何か思いつめたように話し出した。

「ねえ彬、私ね、時々、自分が何だかわからなくなるの」

突然大きな風が吹き、外一面に広がったススキを揺らす。桜は膝を抱えて話を続けた。

「私は彬と一緒に、ここで生きていたい。でもね、時々突発的に、

『ここから落ちて死ねたらいいのに』とか『この紐で首をくくつたら死ねるかな?』とかって思うことがあるのよ」

桜は悲しそうな目をしていた。彬は「またか」と思ったが、

真剣に話を聞く。桜がこんな話するのは珍しくない。数ヶ月前まで、家族を失った悲しみと人を殺したトラウマで心が壊れかけていたのだから。

「なぜだかわからない。父上や母上のところに行きたいわけじゃないの。時々、わけもなく暗くて重い気持ちになるの。生きたいのに死にたい。死にたいのに生きたい。なぜだかは、私でもわからないのよ……。私、どうすればいいの?」

桜は再び、自らの肩を抱いて泣き出した。彬は桜の背中をぽんぽんと叩く。

「桜。そんなに気を病むな。お前は繊細な年頃なんだ。放っておけ。一人で死ぬなんて許さねえからな」

「彬……」

彬は桜を抱きしめた。桜も何も言わずに、彬の胸の中に収まる。そのまま、数分時間が過ぎた。桜が囁くように口を開く。

「ごめんね」

彬は自らの胸元に殺気を感じた。腹に激痛が走る。胸元の桜を突き飛ばすと、桜は手に血濡れの懐剣を持っていた。たしか、あれは彬が渡した護身用の懐剣だ。につこり笑った桜の顔が、行灯の光に照らされる。この上なく端正で完璧な、だけど慈悲の心など微塵もない桜の笑顔が、彼女の心の歪みを思わせた。

「彬、言ったよね。『一人で死ぬなんて許さない』って。じゃあ、二人で死ぬのは？ これなら彬も許してくれるよね？」

懐剣の先から彬の血がぼたぼたと落ちる。彬は腹を抑えて

桜を睨みつけた。不思議なことに、先ほどまで鳴いていた鈴虫が静まり返っている。まるで、桜の狂気に黙らせられたかのように。

「この世は苦しいこといっぱい。苦しくて苦しくて苦しくて苦しくて。理由なんてない。生きてるって苦しいのよ。今なら、死ぬる。ううん。死んでよ。またとないチャンスなんだから！」

この女は危険だ。本能が彬の漆黒の瞳を紅く光らせる。彬は、そこで理性を失った獣と化した。

彬は相変わらず暗い部屋に行灯だけつけて、縁側への障子も開けっ放しにしてそこにたたずんでいた。静かになった部屋に、鈴虫の声だけが響く。傷が思ったより浅かったのか、先ほど刺された腹の傷はもう治りかけている。鈍い痛みはまだ残っているが。

傍らには、彬が愛した娘の亡骸が転がっている。暗くて人間の目ではよく分らないが全身を何か固いもので打ちつけられ、目を覆いなくなるような見るも哀れな死体であると、彬は知っていた。頭から血が流れている。それが致命傷だったのだろう。

痛かっただろうに。苦しかっただろうに。頭から流れた血で汚れているが、そこだけ傷一つ負っていない顔には、安堵の表情が浮かんでいた。

桜は意識を失う間に彬に安心しているような笑顔を湛えて言った。
「幸せだった」、「愛してるよ」と。

（この上なく幸福そうな顔だった。殺されている人間とは思えない
ほどに）

そういえば、殴られている最中、桜はずっと穏やかな顔をしていた。
彬を襲撃する前の、桜の言葉。殴られている最中の桜の笑み。彬は
確信する。

心の傷は癒せても、心の歪みは治せないんだと。

愛妻家の朝食（後書き）

この小説のタイトルは、椎名林檎の「愛妻家の朝食」からとりました
彬くん、文芸部バージョンでは女物の着物着てました。文芸部員に
「女物の着物にして！」と言われたものでw
ここに載せるにあたり、それはまずいので、改変しました

夢のあと

俺が「人間ではない何か」になってから、数年後。

この体になって初めて、女ができた。静穏でありながらも、可愛げのある女だった。

しかし、その女は三、四年後に急な病で死んだ。

俺は素直に、その女の死を悼んだ。

その十数年後。俺にまた女ができた。今度は明るい女だった。

その女は一年くらい後に、人間界で流行っていた病で死んだ。

俺は人間の弱さに失望した。

次の女は、事故で死んだ。

俺は正直、またか、と思った。

その数十年後にできた女は、俺が殺した。

昔の女の墓参りに行ったことがばれて、ひどく責められて、鬱陶しかったのだ。

もう既に、人の生命など、どうでもよくなっていた。

魔界と人間界の狭間。

ある桜の木の下に、一つの四角い大きな石がある。石には墓の主の名前が刻まれているが、名前の部分は割れていて読み取れない。

そこに、一輪の彼岸花あきい持った、着流しを着た男がやってきた。この近くに住む、彬である。彬が墓に水をかけていると、不意に後ろから人ではない何かの気配。彬は振り返らずに、背後に潜む人物に声をかける。

「出てこい。そこにいるのはわかってんだ」

「あ、ばれた？」

空間が歪み、そこから少女が飛び出す。死神の娘、杏子あんずだ。杏子はにんまりと笑う。彬はその笑みを見て、不快そうに小さく舌打ちを

した。

「またお前か」

忌々しげに彬は言った。杏子は時々、彬が住むこの世界にやってくる。その度に障子を破ったり花瓶を割ったり彬の女にちよっかいを出したりするので、彬は正直うんざりしていたのだ。

三ヶ月前、前の女だった「桜」という少女が彬と勝手に心中しようとし、彬が返り討ちにして殺すという事件があった。この三ヶ月のうちに、杏子は一回も彬のもとを訪れていない。彬は安心してしたが、それはつかの間の平穩に終わったようだ。

「何をしに来た」

「だって、おかあさんも柘榴ざくろも死んじゃったんだもん」

柘榴というのは、杏子が人間界から連れてきた猫のことだ。

「柘榴、毎日抱っこして寝てたら、どんどん弱って死んじゃったんだ。アハハ」

杏子は陽気に笑う。杏子は、触ると生き物の生命力を吸いとるという、恐ろしい能力をもっている。植物なら三十秒以内で枯らしてしまう程の、強力な能力だ。杏子はこの能力が嫌いだ、直したり自重したりという選択肢は毛頭ないらしく、相変わらずあちこちで植物を枯らしたり動物を弱らせたりしている。

「暇だからっていうのもあるけど、私、ここの夕焼け好きなんだよね」

真っ赤な空。真っ赤な夕日。確かにここの世界の夕焼けは一級品だ。今も太陽は西に傾き、すばらしい夕焼けを見せている。

「ねえ、このお墓、ペットのお墓？」

「馬鹿」

彬は杏子の頭を軽く叩いた。ペシンという小気味よい音が響く。杏子はくすくすと笑った。

「知ってるよ。本当は昔の女の人のお墓でしょ？ 今のお姉ちゃん以外にも、女の人いっぱいいたんでしょ？ どんな人が好みなの？

そのお墓の人、なんて名前？」

「一度にいくつも質問するな」

彬は煙管に火をつける。彬が吐いた煙が、辺りに広がった。

「じゃあ一つだけ。なんでいつもこの人のところにだけお墓参りに来るの？ 私知ってるよ。彬のところで死んだ女の人はいっぱいるんでしょ？ お墓はここ以外にもいくつもあるらしいけど……：このお墓って誰のだろうねー。紫お姉ちゃん？ 百合枝お姉ちゃん？ あ、わかった。弥生お姉ちゃんだ」

どこから聞いたのかわからない、彬の昔の女の名を次々に挙げていく。彬は参ったという様子でため息をつき、額に手を当てた。

「椿お姉ちゃんかなあ。死神長くんが、彬くんにとって、椿お姉ちゃんはずごく思い入れがあるって言ってたからさ」

椿。その女の名に、彬の肩がびくりと反応する。二人の間に流れる沈黙。普通の間人がこの場にいたら明らかな気まずさを感じるのだが、杏子は全く気にしていないようだった。

「あいつの墓はねえよ」

とある事情により、椿という女に墓はない。

愛した女のお墓参りができない事実。それは、彬にとってくやしくてやりきれないものだった。ここの墓に墓参りに来ているのは、椿のお墓参りができない分、この墓に拜んでやろうという気持ちが少なからずあるからでもある。

「私ね、椿お姉ちゃんのこと、死神長くん聞いたの。あとね、死神長くんね、いつも彬の愚痴言ってるよ。魂があって肉体が死なない。これじゃいつまでたっても魂が回収できないじゃないかー。って」

彬の肉体は老いないし、ちょっとやそつとのことでは死なない。刃物で刺されても、急所をつかれてなければ数日で完治する。第一、他人から襲われても、簡単に致命傷を負うほど彬は弱くない。彬はそれで、四百年以上も生きてきた。

「俺がここに来てること、あいつには言うなよ」

彬が言う。杏子は手で狐の形を作り、凸凹とした墓石の表面に影絵

を映し出す。そしてにこにこ満面の笑みを絶やさずに言った。

「今のお姉ちゃん、もう気づいてるんじゃないの？」

気づいていないわけがない。女の勘は恐ろしく当たることを、彬は知っている。今まで、別の場所に眠る女の墓参りに気づいたときに昔の女たちは色々な反応をした。泣き喚いた女もいたし、平手打ちをしてきた女もいた。ただひたすら我慢する女が一番多かったが、中には包丁で彬を刺し殺そうとした女もいた。

彬が教えないで欲しいと言った理由は、「愛する女を傷つけたくない」などという大層なものではない。泣かれたりすると面倒だからだ。確かに愛してはいるが、女に泣かれるほど面倒なものはない。今はまだ、何をしに出かけたか聞かれても簡単にはぐらかすことができる。しかし、杏子に告げ口されたら終いだ。

「彬はさ、今まで何人の『アイジン』がいたの？」

「知るか」

そもそもどこから愛人に数えればよいのかわからない。十年以上も付き合った女もいれば、数ヶ月で終わった女もいる。「人間じゃない何か」になってから、四百五十余年。一人身の時も多かったが、女がいた時間も決して短くない。

「彬、今回のお姉ちゃんは、何歳までもつと思う？」

「言っな。不吉だろうが」

「だって本当のことじゃん」

彬の元にやってきた女は、なぜか早死にする。大抵は二十代前半で、長く生きても三十を迎える頃には死ぬ。彬が殺した女もいるが、人間界に出かけたときに馬車に轢かれたり、不治の病に冒されたり。例えば、急な病で死んだ女が多いような気がする。この、魔界と人間界の狭間の空気が彬以外には悪いのだろうか。それとも彬と共にいると呪われたりするのだろうか。

どちらにしろ、彬には関係ない。女が死んだら悲しみ、悲しむことに飽きたらまた一人気ままな生活を送るか新しい女を探すまでだ。

彬は彼岸花を墓石の前に置く。そして、墓に背を向け、杏子に告げ

た。

「杏子。俺はもう帰る。墓石に乗ったり荒らしたりするんじゃないぞ」

「はい」

彬は歩いて墓を離れる。杏子は、ゆっくりと墓に近づき、止まった。

「お墓参りに来てもらえてよかったね。でも、今に來なくなるよ。」

ほかの人たちがそうだったようにね。だって、彬には新しい『アイジン』がいて、その人のことが大好きなんだもん。お姉ちゃんはどんなに優しくて綺麗だったとしても、もうそれは昔の話。今はもう何にも言わないただの死体なんだから」

杏子は墓石をよしよしと撫でる。そして、にんまりと笑いながら墓の中の人物に語りかけた。

「結局、彬にとって、女の人みんな同じになっちゃうんだよ。ねえ、桜お姉ちゃん」

夢のあと（後書き）

この小説のタイトルは、東京事変の「夢のあと」からとりました
この曲大好きです

罪と罰（前書き）

（皆さんが一般的にイメージしてるのとは多分違う感じの）ヤンデレ小説です。苦手な方は注意

罪と罰

もしも君に耳があつたら、この声を聞かせてあげられたのに。
もしも君に心があつたら、この愛で包んであげられたのに。

「ご臨終です」

医者が無慈悲な宣告をする。気の毒そうに目を閉じる医者。ベッドに横たわる少女の、だりとした白い腕。長い長い黒髪。その瞬間、ある男の全てが崩れ落ちた。

「梅」

それが、死んだ少女の名前だった。

零夜^{れいちゃ}は彼女が死んでから、何度その名を呼んだことだろう。何度彼女の声を求めただろう。

梅は十歳のときに家族を亡くし、身内もいなかった。零夜はそんな梅の事実上の保護者だったのだ。二人は十三歳しか離れておらず、保護者というよりも兄妹のような関係だったが。

「梅は天使のような子だった。いや、俺の天使だったんだよ」

零夜はことあるごとに、彼女の死を悼む人々に言う。

「あの子はいいい子だった。わがママを言ったことなんてなかったし、人の悪口も言わなかった。なにより、俺を愛してくれた。俺もあの子を愛していた。あの子はただの平凡な、扶養家族なんかじゃない。俺はあの子を一人の女性として愛していたんだ」

最初、梅の死を悲しみ、零夜を元気づけようとする人々は、この最後の言葉を聞いて、困ったように相槌をうつ。無理もない。梅は死んだときまだ十七歳で、零夜は三十歳だったのだ。

しかし、零夜の言葉は本当だ。零夜は実際に梅をただの家族と見なしてはいなかったし、梅を女として愛していた。

零夜は自らの異常性を全く理解していない。零夜の言葉に眉をしめる者がいることも、全く理解できていなかった。

いつしか、零夜はリアルな人形作りに凝りだした。彼は梅そっくりな人形を作ろうとしたのだ。零夜は人形を作っては、壊す。まるで自分の芸術作品を打ち壊す、陶芸家のように。

「梅はこんなモノじゃない」

まるで強迫観念に追われるように、人形を作り続ける零夜。仕事から帰ると、彼はろくに食事もとらず、睡眠もとらず、人形を作り続けた。当然、それは仕事や私生活にも影響する。そして人形を作り始めてから一ヶ月後、零夜は勤めていた会社から解雇された。それでも彼は、貯金を元手に、人形を作り続ける。

数年後、零夜は一体の素晴らしい人形を作り上げた。生き生きとした黒い目。微笑を形作った、桜色の唇。柔らかな白い肌。生前の梅に瓜二つだ。

「ほら、梅はまだ死んでいない。周りの奴らがおかしいんだ。死ぬわけがない。俺を置いて死ぬわけがないんだ。俺は梅を十七まで育てたし、梅の学校にいた、あの子をいじめる奴らも俺が懲らしめた。梅に言い寄る男たちは俺が追い払ったし、梅と一緒にホテルに入った中年男だって、俺が、殺してやった」

零夜は歪な笑みを浮かべ、笑う。零夜は、自分が殺した中年男の無残な死体を思い出して、けたけたと笑い出した。零夜自身、なぜ梅が派手な格好をして中年男と会っていたのか、見当もついていなかったのだが。

笑いながら人形に触れ、愛おしげにその髪を撫でる。人形の服は、梅が遺した服でできていた。

「梅の匂いだ。ああ、梅、梅、梅……」

死人の名を何度も何度も連呼する。

「梅はまだ死んでいない。少し、俺のところからいなくなっていただけなんだ。これからは、ずっと一緒だ」

人形は、零夜の言葉に答えることもなく、ただただ柔らかな微笑を

形作っていた。

□ □ □

「梅ってさ、援交してるんでしょ？」

突然零夜の耳に飛び込んだ、梅の同級生らしき女子高生の話し声。零夜が梅を迎えに、通学路を歩いているときのことだった。短いスカートを履き、髪を染めた三人の女子高生が、梅の悪口を言っていたのだ。

「あー、それっぽいところあるよねー。あいつの家、両親いないんでしょ？ どうやってあんなブランド物買ってるんだか」

「確かに、顔はちよつと可愛いけどさ。あいつ調子のもてるよね」
「男子の前では可愛い子ぶってるし」

「ねえ知ってる？ あいつさ、馬鹿の癖に、去年の数学の成績だけ良かったらしいよ。あの黒部に体売ったんだって」

「うわ、あの黒豚に？」

「超ウケるんだけど」

「キツモー」

零夜は、もはや何のことだか分からずに、三人の女子高生が歩いていくところを見ていた。そして、回らない頭をフル回転させて、やっと梅の悪口だということを理解した。

梅の下駄箱に、毛虫が入っていたのがその翌日。

梅が泣きながらそれを零夜に訴えたのが、その日の放課後。

嫌がらせの主犯と思われる女子生徒の家が放火され、女子生徒が大火傷を負ったのが、そのまた三日後。

□ □ □

それは、よく晴れた午後のことだった。

友達と出かけてくると言って派手に着飾った梅が、中年男と一緒にホテルに入っていくのを零夜は見た。鼻の下を伸ばす中年男。

作り笑いを浮かべる零夜の愛しい少女。

梅と一緒にいた中年男が、全身をズタズタに切り裂かれた状態で、路地裏で息絶えていたのが、その一週間後。

□ □ □

人形が出来上がってから一ヶ月後。貯金が底をついてきたところだった。零夜は一週間、何も食べていない。

「なあ、梅。梅は俺のこと愛してるか？」

『愛してるよ』

「俺のこと、もう置いていたりしないよな？」

『もちろんだよ。零夜』

零夜は一人で人形に向かって問うているだけだったが、衰弱している彼には、まるで人形が話しているかのように聞こえていた。

外は木枯らしが吹く季節になっている。水道を止められ、風呂にも入れなくなった零夜は、夜になってから川で身体を洗うようになり、飲み水は公園の水飲み場で調達するようになった。再就職するという選択肢は零夜にはない。梅の人形を置いて家を開けるのがたまらなく不安だったのだ。

暖房もつけられない零夜は、布団の中で人形を抱いて、震えながらうずくまっていた。木枯らしがアパートの窓をカタカタと揺らす。零夜は寒くてたまらなかったが、「梅」といられれば満足だった。「人間の」梅が「いなくなつて」から、片付けられていない部屋はゴミで溢れ、服はほとんど洗濯されていない。どんどんみすばらしい格好になっていく零夜と対称的に、人形の梅は相変わらず美しい。つた。

『何か食べないと、死んじゃうよ？』

「わかってるよ。何か食べないとね」

零夜はとりあえず、近所のスーパーに行ってみた。久しぶりに見た色とりどりの食材が、零夜の目を刺激する。周りの買い物が訝しげな表情で零夜を見るが、零夜は気にしていなかった。

買い物がそんな表情をするのも無理は無い。手には人形を持っており、零夜は髭の処理もしていない。髪や服は何日も洗っておらず、異臭を放っていて、身体は痩せている。まるで、ホームレスのような格好だった。

久々の暖房が零夜には少し暑い。零夜は惣菜売り場の前で止まった。久々の食べ物の匂いが、鼻をくすぐる。財布を開け、小銭入れを開く。中に、銅製の硬貨が二枚、虚しく転がっていた。

やろつかやるまいか。零夜にはもはや、罪の意識は残っていない。零夜は美味しそうな匂いを放つ唐揚げ弁当を掴み、上着の中に隠すと、一目散に店から逃げ出した。後ろから店員が追いかける。もしも捕まったら、警察から弁当と一緒に梅を没収されるかもしれない。そう思うと、零夜の足は早くなっていく。店員は、もともと足が速い零夜に追いつけなかった。店の中にいる間に降り出した雨が、零夜を強く打つ。身体が芯まで冷えていき、水溜りに足を突っ込んで靴とズボンがびしょぬれになったが、構わずに走り続けた。無論、人形は濡れないように上着に包んで保護している。

家に着くと、零夜は早速人形を取り出して「会話」を始めた。

「う、梅、俺、やったよ……」

『私の言うこと聞いてくれたのね。嬉しいな』

「当然だろ？」

零夜は笑った。梅人形も柔らかに笑っている。

『警察に捕まったりしないかしら？』

「警察がやってきても、君だけは守るよ。安心して。梅」

零夜は蜘蛛の巣の張った食器棚から久しぶりに箸を取り出して、食事にありついた。

それが零夜と「梅」の破滅に繋がるとも知らずに。

「梅、全部食べたよ」

返事は無い。

「梅、俺、全部、食べたよ？」

返事は、無い。

零夜には、梅の声が聞こえなくなっていた。それは紛れもなく、食事を取ったから。体だけが正常な状態に近づいたからだ。

「梅、なあ、梅、返事をしてくれよ」

零夜は人形の肩を掴んで揺さぶる。外では雨脚が激しくなり、風も強くなって、びゅうびゅうと音を立てている。

「……違うよな」

遠くから、雷鳴も聞こえてきた。

「梅はしばらく俺と話せなかったただでここ最近やっと話せるようになって俺が貧乏になってみすばらしくなっても俺と話すのやめたり嫌な顔したりしない良い子で、なあ嫌いになるなら俺を殺してくれよ俺を愛してくれよなあ」

雷鳴が徐々に近づいてくる。

「……あれ？ 梅？ なんで、俺がこんなに苦しんでるのに、声かけてくれないんだよ？ なんで俺が悲しんでるのに、声かけてくれないんだよお」

零夜の目から、涙が零れ落ちる。人形は、相変わらず美しく微笑んでいた。その顔は零夜の悲しみなど、全く映していない。

ただただ、美しく微笑んでいた。

「違う」

雷が、大きな音を立てて鳴り響く。電気がついていない薄暗い部屋を、絶望に満ちた零夜の顔を浮かび上がらせた。

「これ、梅じゃ、ない」

零夜は台所に走り、包丁を掴む。そして大股で戻ってくると、人形

の顔に勢いよくそれを突き刺した。人形の顔が苦しんでいるように歪む。零夜は包丁を持った手を何度も何度も振り下ろした。ビスケットのような硬い素材でできているわけではない人形は、いとも簡単に裂ける。柔らかな微笑みは見る影もなく、リアルに作られていた手足も崩れ、綺麗な服も滅茶苦茶に破れた。

零夜はただ機械的に包丁を振り下ろす。涙も出ない。心も痛くない。しかし、胸の中で何かどす黒いものが渦巻いて、それが何なのか彼にはわからなくて、零夜は奇声ともとれる叫び声を上げた。

しばらくすると人形は壊しつくされ、もう壊すところがなくなった。零夜は包丁を置くのも忘れ、梅の姿を家中探した。

「梅、梅、梅、どこだよ……どこにいるんだよおっ！」

ゴミまみれの部屋を掻き分けて、愛しい娘の姿を探す。包丁を持ったまま玄関から走り出て、アパートから飛び出そうとしたその時だった。

目の前に降りる階段が立ちはだかったのは。

それは二階に住んでいる零夜にとって、いつも外に出かけるときに見る風景だったが、今日は普段と違って見えた。

零夜は全てを思い出したのだ。

いつも通り一緒に出かけようとする梅と零夜。階段の上の方で足を滑らせ、傾く梅の体。転がり落ちる梅。

「あ、あ、あ、あ……」

なぜ今になって思い出したかはわからない。おそらく、精神が極限状態の今、梅が事故にあった時の光景が、フラッシュバックしたのだろう。

零夜は絶叫した。涙が目から溢れ出す。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！ 梅が俺を置いて死ぬわけが、死ぬわけが……」

そこで零夜は静止する。

（だったら、あの光景はなんだ？ 梅が階段から転がり落ちていくあの光景は、なんだったんだ？）

「もう、わけ、わからないよ。梅」

零夜は消え入りそうな声で、途切れ途切れに言った。零夜の絶叫を聞いた近所の住民数人が部屋から出てきて、遠巻きに見ている。

「死んだら梅に会えるかな？　梅と同じ天国に行けるかなあ？　な、答えてくれよ。梅え……」

雷の音は遠くなり、地を打つ雨の音のほうが大きくなった。零夜の目から生氣は消え、何も映していない。零夜は包丁の刃を自らの首筋に当てた。見ていた住人の一人が、制止しようと駆けてくる。

零夜はためらいなく首に包丁の刃を押しつけ、そして勢いよくそれを引いた。遠くで見ていた住人から悲鳴が上がる。

零夜の首筋から勢いよく鮮血が噴き出し、先ほどまでごく平凡だったアパートの一角を、真っ赤に染め上げた。

もしも君に耳があつたら、この声を聞かせてあげられたのに。

もしも君に心があつたら、この愛で包んであげられたのに。

零夜は崩れ落ち、もう二度と起き上がることはなかった。



「あーあ。可哀想な零夜ー」

零夜の亡骸に近づく一人の少女がいた。死神の少女、杏子である。

「結局、梅お姉ちゃんは、零夜のことちつとも好きじゃなかったみたいなのだねー。だって、梅お姉ちゃんにとって零夜は、気持ち悪い生活費稼ぎでしかなかったんだもん」

それでも零夜は、自分に向けられた作り笑いを本物だと受け取っていた。梅がいい子だと妄信していた。

「愛ってなんなんだろうね。杏子にはわからないや」

近所の住民の通報で、救急車と警察がやってくる。救急隊員にも、警察官にも、死神の杏子の姿は見えていない。杏子は凄惨な現場の

ど真ん中で、にこにここと笑ってしゃがんでいた。そして、零夜の亡骸の頭をペシペシと叩き、こんな物騒な言葉を吐く。

「さてと、さっさと零夜の魂を、地獄に届けないとね」

罪と罰（後書き）

この小説のタイトルは、DEC027さんの「罪と罰」からとりました

DEC027さんごめんなさい。ファンの皆さんごめんなさい。全力で土下座して謝りますorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591v/>

死ノ色狂想曲

2011年10月9日13時29分発行